

平成 29 年度大阪大学卒業式・大学院学位記授与式 総長式辞

はじめに

本日、人生の新たな一步を踏み出さんとされている学部卒業生の皆さん、大学院修士課程・博士課程修了生の皆さん、大阪大学を代表して心からお祝い申し上げます。ここに、理事、監事、部局長、多くの教職員の立会いの下、平成 29 年度卒業式・大学院学位記授与式を挙行できましたことは、私ども大阪大学全構成員の大きな喜びとするところです。

この晴れの日を迎えるまでの皆さんの日々の研鑽とたゆまぬ努力を深く讃えます。また、この日まで長きにわたり学生の皆さんの勉学と研究を支えてこられました、ご家族の方々には、深甚なる敬意を表するとともに衷心よりお慶び申し上げます。

皆さんご存知のように、本学は、昨年度実施の入学試験において、あってはならない事態を引き起こしてしまいました。このことで、本日、卒業式、学位記授与式にご出席の皆さんにも、大変なご心配とご迷惑をお掛けしました。

いま、大阪大学では、このことにより新たに合格となられた方々への対応に誠心誠意努めておりますとともに、組織全体を挙げての再発防止への取り組みを進めております。

そのような中で、私は、新たな合格者になられた方々に何を真っ先にすべきかを考えました。本学が最も大切にすること、あるいは最重要視する価値観、それは一人ひとりの学生を大切にし、語りかけることです。私はこのようなときこそ、この価値観に基づいて行動することが重要だと考えました。

そこで、新たに合格者となられた全員とその保護者の方々に、場合によってはご自宅までお伺いして語りかけ、お詫びをすることを行いました。その過程でさまざまなお叱りを受けましたが、予想もしなかったことながら励ましを受けることもあり、感極まったこともあります。そこから、本当に多くのことを学びました。

私ども教職員は一丸となって、皆さんが、大阪大学の卒業生、修了生であることに高い誇りを持ち、胸を張っていただけるよう、信頼回復に向けて誠心誠意努めてまいります。

長い人生を最善観の考えで

さて、大阪大学には、これまで延べ 20 万人を超える学部卒業生・大学院修了生がおり、皆さんも今日からその一員となります。その門出の日に、このように皆さんに直接語りかけるこの機会を、私は大切な時間と認識しております。

皆さんは、「最善観」という言葉をご存知でしょうか。私は、今日から新たなスタートを切られる皆さんへの餞の言葉として、この言葉をお贈りしたいと思います。

最善観とは、“さい”は「最も」、「ぜん」は善悪の「善」、「かん」は主観や人生観の「かん」、「観る」という字を書きます。一言で表現しますと、「全ての出来事は必然かつ最善である」という意味になります。

この言葉は、哲学者であり、教育者であった森信三先生のお言葉で、戦前の大阪天王寺師範学校での講義録に残っています。森先生は、「現在の自分にとって、一見、いかにも為にならない、悪い事柄が起こっても、それは、必ずや神が自分にとって、それを絶対に必要と考えて、与えてくれた。すべての現象は、自分にとって最善のことが起きていると信じることである。」とおっしゃっています。

皆さんは、大阪大学で、日本有数の教育を受けてこられました。世界的にも最先端の研究に携わってこられました。そのような中で、皆さんは充実した学生生活を過ごしてこられたことと思います。

しかし、敢えて申し上げますが、皆さんのこれからの人生は、楽しく、充実したことばかりでは決してありません。長い人生の中では、自分自身が思い描いたとおりにならないことも多々あります。大きな失敗をすることや、大きな災害に遭うことがあるかもしれません。

もし、皆さんが、そのような辛くて途方に暮れるような状況に至ってしまった時でも、決してそこから目をそらさないでください。その状況は必然である、つまり、目の前に立ちはだかる試練に対して、それを「不幸なこと」と考えずに、自分の人生において必要なこととして受け入れる。その不幸だと考えていたことが、実はありがたい幸せなことであった、と思える日が必ず訪れるはずである。こうした「最善観」の考えを持つことができれば、堂々とその試練に立ち向かう勇気が湧いてくるはずです。

順調なときも不調のときも

そのときに大事なことが二つあります。

一つは、物事を複眼的に捉えること。これは、物事にはプラスがあれば必ず裏にはマイナスがあり、表にマイナスが出れば、裏はプラスがあるという、森先生が最善観の講義の中でおっしゃったことにも通じるところがあります。

非常にわかりやすい例を一つ紹介します。明治から昭和初期を生き、金子みすゞさんという詩人をご存知でしょうか。多くの名作を残しており、そのなかに「たいりょう」という詩があります。

とても短い詩ですが、この詩の前半はこう始まります。

あさやけ こやけだ
たいりょうだ
おおばいわしの
たいりょうだ。

この詩の前半部分からは、朝日に輝く大漁旗をはためかせて港に停泊する船。岸壁からその船を取り巻く活気にあふれた人々。その人々は、大漁の鯛の前で誇らしさを漂わせた笑顔を浮かべている。そんな風景が想像できます。

しかし、この詩は次のように続きます。

はまは まつりの
ようだけど
うみの なかでは
なんまんの
いわしの とむらい
するだろう。

人間たちがお祭り騒ぎをしている港の風景から、次の瞬間、その視線は海の中に向かっていきます。そして、その海の中からいなくなった鯛を思います。

順調な日々を送っているとき、幸せなとき、そのようなときは、その裏側にあるものに目が届きにくいものです。また、正しいとされている情報に接したとき、本当にそれが正しいのか、その真偽を自らの目で判断することも怠りがちです。

しかし、物事を一つの方向からだけで捉えることはとても危険です。何かを見たり考えたりするとき、その見方を当たり前とせず、違う方向から見たり、その見方そのものを見直す俯瞰的な視点。この視点が重要です。

一段と高い視点から物事を複眼的に捉えることは、今日までの大学生活において、教養や専門知識を身に付けるプロセスで、皆さんは学んでこられたはずです。その育んできた視点に自覚と自信を持ち、いつまでも大切にしていきたいと思います。

もう一つは、後ろを振り返らないこと。それは、過去を反省しないということではなく、くよくよと過去を引きずらないということです。

長い人生の中では、選択を迫られる機会がたくさんあります。それは、小さなものから、後に人生の分岐点と思える大きなものまで、さまざまです。人間は、いくつもの選択を重ねながら、一本の人生の道筋を描いていきます。

目の前に試練が迫ってきたとき、過去の分岐点を思い出し、あの時にもう一つの道を進んでいたら、と後悔することがあるかもしれません。しかし、後戻りすることのできない人生において、それは無意味です。

皆さんは、大阪大学で、豊かな教養と深い専門知識を習得され、また、学生生活においてたくさんの異なる価値観を持つ人々と交流する中で、自分なりの価値観、アイデンティティを培ってこられたことと思います。それは、組織についても言えることで、私は、先程、大阪大学が最も重要視している価値観は、一人ひとりの学生を大切

にし、語りかけることである、と述べました。

今こそ多様な考え方、生き方が尊重されるべき時代です。その中で、皆さんは、判で押したように多くの人に浸透している先入観にとらわれることなく、自分なりの価値観に基づいて、本気になって自分自身が納得のいく選択を見出していただきたい。そして、その自らの選択に誇りと責任を持っていただきたい。あなたの人生はあなた自身で描くべきなのです。もし、その道が後に反省するような選択になったとすれば、その次の分岐点でその経験を活かせば良いのです。

決して他人任せの選択をしてはいけません。そのようなことをして首尾良く事が運ばなかった場合、その選択を薦めた人に責任を転嫁するような人生を送ることになってしまいます。

どうか皆さんには、人生が順調なときこそ、人の情けや他人の苦しみに思いを寄せることができる人間として、不調なときには、それを必然のこととして、その中に潜む深淵なる教訓を悟り、前向きに受け止められる人間として、これからの人生を元気に歩んでいただきたい。そのように心から願っています。

素晴らしい人生を送られんことを

最後になりましたが、本日に至るまでに、家族、友人そして研究仲間、皆さんを陰で支えてくださった大勢の方がいます。改めてその方々への感謝の念を思い起こしてください。そして、青春を過ごした大阪大学のキャンパスと懐かしい思い出を大切な財産としてください。

皆さん一人ひとりのこれからの人生が、健康と幸運に恵まれ、悔いのない生涯を送られることを祈りつつ、私の式辞といたします。

皆さん、どうか幸せになってください。これからの長い人生のなかで、皆さんが1秒でも多くの時間を笑顔で過ごしてくださることを、切に祈ります。そして、自分のみならず皆が幸せに過ごせる社会を創り上げてください。

本日は、おめでとうございます。

2018（平成30）年3月22日

大阪大学総長
西尾 章治郎